

[施業研究室]肥培林業の経営に関する研究

宮崎, 安貞
九州大学農学部附属演習林 : 助手

<https://doi.org/10.15017/1456101>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和37年度, pp.11-12, 1963. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

- 前頁の注
- H(目) は目測樹高
 - H(ワ) はワイゼ測高器またはアルティレベルで測定した樹高
 - h(枝下) は枝下高

IV. 成 果

目下とりまとめ中であって成果をみるにいたっていない。

V. 今後の見越し

本年度の調査結果は、昭和38年度中にとりまとめる予定である。今後5年毎に調査を行なえば、北海道演習林における広葉樹林の成長量推定のための基礎資料として十分に活用されるものと見料される。

肥培林業の経営に関する研究

宮崎 安貞

施肥林業の経済的可能性の検討を目的として、柞屋演習林、他に、ノ2ヶ所の試験地を設定し、1953年から調査を継続してきたが、これまでの8年間の成長経過より、次の諸点が認められた。

- (1) 一般に地力の劣るところでは、施肥処理が造林初期の成長におよぼす効果は大きい。肥沃地では小さい。
- (2) 植栽後数年間は、肥料の多さに比例して成長し、特に根元直径にその傾向が著るしいが、年の経過とともにその効果がうすれ、肥料の限界生産力は小さくなる傾向が認められる。
- (3) 窒素分の施肥効果は大きく、とくに2代目造林地において顕著である。

(4) スギでは地味の劣るところでは施肥効果大きく、ヒノキでは地味にかかわらず肥効があらわれている。アカマツは肥沃な天然生林の伐跡地を対象としたため、その効果はあきらかでなかった。

宮崎安貞 肥培林業の経営に関する研究 第8報

日林会九州支講 No. 16 1962